

道場親信著

『下丸子文化集団とその時代』

——一九五〇年代サークル文化運動の光芒』

評者：大串 潤児

第二次世界大戦の「終結」からわずか5年という時間しか経っていなかった。戦争——というよりは「空襲」「引揚」などをはじめとしたさまざまな生活破壊の経験は「もうこりごり」だという意識は現在よりも広く、深く人びとの心を捉えていた。同時に、「戦争」そのもの、ましてや「植民地」（——本書を考える一つの時代的キーワードでもある）の評価・理解はおそらく不十分なままで、「戦争」と「生活」が同居しえた日本近代総体の社会への視線もそんなに深刻な反省の対象ではなかっただろう。だから、本書のいう朝鮮戦争下「戦時」のリアリティは軍事基地周辺のみには焦点化されていくともいえる。すでに「占領」は、人びとの生活再建の選択肢を大枠で制約し、同時にそれを支える制度的枠組みを作り出している。どこに向かうかはそれぞれの経験に根ざしていたとはいえ、「生活の再建」、あるいは「新しい生活の創造」に動きつつある人びとの前に、アジアにおける戦争の危機が迫って来た。人びとの認識のありかたにまで影響を及ぼす冷戦という新しい「戦争」の磁場が生まれつつあるなかで、どのような感情が生まれ、人びとの結びつきが生まれ、歴史のなかでそれらはどのような意義を持ったのだろうか。東アジアにおける「ポスト

日本帝国史」と、冷戦という「新しい戦争」の始動が折り重なる時空間がそこにある⁽¹⁾。だから、ここでも「人びとの結びつき」は、新たに再提示される「国境」を越え、新たな出会い（また出会い損ね）をふくむものとなる。

歴史意識とはさまざまな意味を表す表現であるけれども、(1) 同時代を歴史のなかに位置づけること（過程段階的な認識）と、(2) 「鏡としての歴史」、メタファーとしての歴史（時代状況の類縁性の認識、あるいは「断片的事実それ自体の触発力）、とに大きくは二分され、それらは同じく現代の議論に歴史的文脈を提供する、あるいは読み直しを迫る（「脱構築」する）重要な役割を負うはずである。おそらく、道場親信がこだわったことは、「批判的公共性」の構築の前提となる歴史認識の欠如、あるいはその狭隘性をいかに克服していくか、そのことによる「批判的公共性」（とそこに登場するもろもろの議論の）活性化であったように思う⁽²⁾。とすれば、評価軸は、本書によって提示された歴史的な事実が、現在の「批判的公共性」構築のためにどのように豊かなものを提示しえたか、にあり、そのことは同じことだけれども、明らかとなった歴史的事実——対象に即して「批判的公共性」の萌芽・可能性が歴史具体的にどのような姿であったのか、この点をどの程度明らかにしえたのか、と設定することが大事だと思う。

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第一章 工場街に詩があった

第二章 下丸子文化集団とその時代——五〇

(1) 道場親信『占領と平和——〈戦後〉という経験』青土社、2005年など。

(2) 道場親信『抵抗の同時代史——軍事化とネオリベラリズムに抗して』人文書院、2008年。

年代東京南部サークル運動研究序説
 第三章 無数の「解放区」が作り出したもう
 ひとつの地図——東京南部の「工作者」たち
 補章 サークル運動の記憶と資料はいかに伝
 えられたか
 第四章 全国誌と地域サークル——東京南部
 から見た『人民文学』
 第五章 東京南部における創作歌運動——
 「原爆許すまじ」と「南部作詞作曲の会」
 第六章 工作者・江島寛
 第七章 東京南部から東アジアを想像した工
 作者——江島寛再論
 註／東京南部文化運動年表／あとがき

戦時期に軍需産業地帯として発展し、さらに朝鮮戦争下にはアメリカ軍に接収された工場・施設（飛行場——基地）などが密集する「東京南部」とよばれた大田・品川・港区、とりわけレッドパージ反対闘争をも経験していた東日本重工業（アメリカ軍管理下のPD工場）や文学活動が盛んであった北辰電機工場がある下丸子に安部公房・桂川寛ら若き「戦後アヴァンギャルド芸術家」が「入り」、そこに「下丸子文化集団」というサークル文化運動のまとまりが生まれ出される。朝鮮戦争下のこの地域は「戦時」と認識される（ただ、この認識が急速に薄れるという著者の把握は若干図式的か）。まずはこうした動きを、下丸子や東京南部周辺地域で活動していた労働者たちの側から考えるための前提＝個人の経験史の諸相が提示される。さらに東京南部文化サークル運動の概要と『下丸子詩集』をはじめ作品の解説、反響などが指摘されている（第一章）。

ついで、政治・文化状況のなかで人びとが「書くこと」の実践的意義を多層的に指摘し、かつ「書く」営みを支えた集団性を同時代的な集団論のなかで検証しようとする意図をもあわ

せもって「下丸子文化集団」の概要が描かれる（第二章）。そこでは地域的な広がり（「南部」への拡大）と「文化工作者」としての自己規定の生成の論理の跡づけが重要な論点となる。特に、初期の運動の「反省」のなかから紡ぎ出された新しい運動論・文学方法論のゆくえが興味深い⁽³⁾。さらに「工作者」の否定から創造への「純化」への運動の軌跡、そして1959年の「解體」までの過程がたどられている。

第三章は、より「工作者」群像に踏み込んだ第二章のエッセンスともいえるが、サークル運動とその結びつきを「無数の解放区」と捉えること、また「地図」の方法と発想が鮮やかである（175頁）。本書では東京南部のサークル文化運動の根にあった方法を「街を自分たちの地図で所有し直す」（23頁）とも指摘されているが、この視点は注記していないが同じく1950年代社会運動を担った北沢恒彦の発想⁽⁴⁾とも連関してくる方法だろう。なお、第二・三章で叙述されている長崎県大村収容所の文学サークル「大村朝鮮文学会」と東京南部サークル運動との「交流」はより一層の検証と考察を要する事例である。なぜなら、本書の諸所で関説されるアジア認識（「怒れ、高浜」改作問題（362頁）や「内なるアジアの忘却」など）をいわば「総括」する位置にあり、「この時代固有の「つながり」の質」（204頁）を象徴的に示す事例であるからである⁽⁵⁾。また、第五章はうたごえ運動の展開を背景に置きつつも、より創造的な可

(3) 115～116頁など。例えば『葦——人生記録雑誌』（復刻版、国書刊行会、1985年）が提唱した「かわず欄」——短文で誰もが何を、語っても良いとした投書欄との対比。拙稿「山本茂実と地域「葦会」」『年報日本現代史 第8号 戦後日本の民衆意識と知識人』現代史料出版、2002年。

(4) 北沢恒彦『方法としての現場』社会評論社、1974年。

(5) 脇田憲一『朝鮮戦争と吹田・枚方事件——戦後史の空白を埋める』明石書店、2004年。

能性の試みとして「南部作詞作曲の会」の活動をまとめたものである。

記憶と自己そのものを再検証しつつ、記録を残し、自己の文化運動の過去と対話しながら行われた再創造の運動は、それ自体一つの文化運動であったことは補章の叙述によってたいへんよく分かる。というよりは、それはすでに「補章」ではなく、この章自体が高度成長期・経済大国、そして現代日本社会に拮抗した「もう一つの文化運動史」であったともいえる。

また、いわゆる「中央誌」である『人民文学』も、東京南部という「地域」から（あるいは地域のサークル運動家の文学・文化論から）「再読」されることとなる（第四章）。そして、いわばもっとも『人民文学』らしい廣末保編集長時代の「実践と創作」論争において、江口＝江島寛の果たした役割と彼の主張した論理（「実践と創作」——政治と文学を切り離さないという思想・方法）が注視されている（「集団と個人」）。

第六・七章は江島寛論である。これまでの叙述のなかで、東京南部の文化運動をその生態から、論理的達成までをふくむその総体を認識するための結節点にこの人物は存在している。前述のように1960年代以降の文化運動再検証の動きのなかでも常にふりかえられるべき人物として運動の当事者にとっては大きな存在であった。個人的には、本書の意義は江島寛という人物を、その実践と創作という文化論からも、また東アジアへの視線を持った一思想家としても、さらに「工作者」概念を歴史具体的に具現化した存在という意味からも、再評価した点にあると思う。

さて、本書の課題意識（および本書の意義）はおおよそ次の二点に集約されよう。第一に、従来の歴史叙述では積極的にその意味が考察さ

れず、かつまとまった時代像としても叙述されてはこなかった1950年代（とくに朝鮮戦争をはさむ前半期）という時代を描いたこと。第二に、その際、広汎な文化欲求に根ざした民衆自身の「文化創造」の営みを掘り起こし、その意味を考えたこと。そして、第二の具体的な史実の提示という方法により、第一の叙述を豊富化した、ということである（「はじめに」）。

文化史・運動史・思想史・政治史の領域的複合の交点が、対象としての文化サークル運動（特に詩作のそれ）であってみれば、本書は一つの民衆の表現様式論、その歴史的展開として読むことも出来るだろう。これが第一の論点である。それは例えばモダニズムの「川柳の時代」⁽⁶⁾、日中戦争期における「短歌の時代」⁽⁷⁾、戦時における「朗読詩の時代」⁽⁸⁾に匹敵するほどの、「詩、(うた)の時代」「詩作の時代」の歴史的な位置づけと、それまでの様相との変転、時代的個性の析出、「表現」をテコとした思想的自立とは何か、という論点とも接続することとなる。「うまい／へた」という問題は本書でも注目されているけれど、個人的関心として個別具体的には、例えば『京浜文学新聞』を編集・発刊しつつ東京南部文学サークルを支えた入江光太郎の活動と、戦時下、吉野裕による「拙劣歌」の意義の提起⁽⁹⁾との関連といった問題が詩作の評価ともかかわって興味深い（183～186頁など）。

ただ、本書では「詩」が、表現とその根底にある経験とのズレを含みこんだ関係構造それ自

(6) 田辺聖子『道頓堀の雨に別れて以来なり——川柳作家・岸本水府とその時代』上・下、中央公論社、1998年。

(7) 中野重治『中野重治全集17 斎藤茂吉ノート／室生犀星』筑摩書房、1997年。

(8) 坪井秀人『声の祝祭』名古屋大学出版会、1997年。

(9) 吉野裕『防人歌の基礎構造』筑摩書房、1984年。

体としてよりも、人びとの表現欲求解放のメディア、あるいは人びとを繋ぐ「共感のメディア」として把握されているのではないか。そこで「共感」とは、主体における「認識の変化をもたらすもの」も含んで把握されている。現在の歴史学においては「感情史」という方法も提起されているが、落書きや替え歌などもその領野にふくんで展開された文化運動は、「共感」という人間の根幹に位置する形式をどれだけ掘り起こしていったのだろうか⁽¹⁰⁾。「批判的公共性」の底に「親密圏」を構成する「共感」の層があるとすれば、この問題は本書のサークル運動に参加した人びとの「結びつき」の論理を照らし出す論点になるだろう。

また、ここのあたりはきちんとした分析がないのだけれども、新聞投書などを別とすれば、おそらく戦時期における「戦意高揚」の「演説」や出征挨拶などの表現実践、また戦後における「民主主義」は何よりも討論することであったことなど、戦時から占領・戦後改革期は何よりも「話すこと」（「話すことを」強いられること）が公的領域を占めていたのではなかろうか。と、すれば「書くこと」の欲求はより広汎な人びとの基層に沈殿している表現欲求とふれあい、他方、公的言説に乗らない「囁き」をも解放するものであったように思われる。「書くこと」の歴史性もまた詰められていない論点である。

本書を生み出した研究に先だって（あるいは同時期に）、著者は「少数者の最終的には「個」にゆきつく存在の尊厳を守りつつ、人間の結合が力、を生み出すことの解放性も手放さないこと」の重要性を説き、この視点を「歴史」を見る眼として大事なものと述べていた⁽¹¹⁾。それ

は、言い換えれば、「個」のなかにどのような「人間の結合」——その芽となる経験史が存在しているかという問題であり、出会いの「場」の文脈構成的な歴史叙述と、個人に即した伝記的叙述という方法の結節点に問題は設定されるだろう。東京南部に暮らし、文化運動の担い手となった人びと——特に青年たちの人間学的分析とでもいう問題と書いていいかもしれない。とりわけ、「下丸子文化集団」は企業（中小も含む）や職場を越えた地域サークルとして存在していた。本書に登場する人びとにとって「地域とは何か」という問題、本書第二の論点でもある。

まだほとんど解明されていない戦時期における産業報国運動の経験（——産報運動においても東京南部地域は中小の産報が連合体を形成するものが主流）がどのような影響をこの地域の文化運動にもたらしたのかはとりあえず置いておこう。ただ北辰電機の文学サークルの前史として戦時期の文学グループの存在は注目すべきことがらであり、プロレタリア文化運動と一直線に系譜を引いてよいかは論点となる（94、120～121頁、文化集団参加者の自己意識としての系譜論はまた別の問題）。また、戦時労働需要によって多くの農村出身者が集い、また同時に空襲下で離散していったなかなかつかまえてたい人びとの流れのなかで、どの程度の労働者が従来からこの地に住むものであり（職住一致・自宅通勤者）、戦後に新たに流入したものであるか（職住一致・下宿や社宅住まいの単身者）は、実はよくわかっていない⁽¹²⁾。1952年頃からの「下丸子文化集団」の担い手は多く20代の青年であったという（113頁）。戦中に国民学校教育をうけて敗戦を経験し、進学・出郷の経験を抱えた若者たちを想像できる。それは、

(10) 鶴見俊輔『限界芸術論』（筑摩書房、1999年）における「共感」論の位相という課題につながる。

(11) 前掲、道場『抵抗の同時代史』17頁。

(12) 最近のものでは橋本健二編『戦後日本社会の誕生』弘文堂、2015年。

ほぼこの地域を移動することのなかった小関智弘による産業報国運動の経験をも見据えた戦時戦後の「東京南部」像と対照させてみると⁽¹³⁾、出郷高学歴青年労働者の文化運動——その具体像が江島寛論（第四章）——とも位置付けて見ることが出来るだろう。そしてこうした人びとにとって、地域での「つながり」とは何であり、「ふるさと」（「ふるさと南部工業地帯」）とは何だったのだろうか、という疑問が残るのである。また反米意識が地域社会のなかでどのような回路を通じて現出していくのか、といった問題についてもすでに問題提起がなされている⁽¹⁴⁾。

さらに、問題は個人史に再びかえってくるだろう。江島寛論についていえば、著者の社会運動研究の方法論のなかで、次第にある時点から闘争や社会運動に参加し、その後また別の人生を歩んでいった人びとにとって、彼・彼女たちが経験した詩作や文化運動、広く闘争や運動とは何だったのか、という「問」が前景化しているように思われる（53頁ほか⁽¹⁵⁾）。この方法は、研究史？的に見ると、おそらく「思想の科学研究会」のなかで議論され続け（「ひとびとの哲学」——伝記という方法）、叙述として提出され⁽¹⁶⁾、事典の編纂・項目叙述を支える視点・方法となっていた⁽¹⁷⁾。本書に江島寛論があるのはその意味でとても大切な構成だと思う。なぜなら、そしてこの方法を採用することによって、「勝利」（あるいは敗北）などなどと言った

「公的」な運動史叙述そのものを揺さぶり、同時にその再構成を促す論点の提示が可能になるからだ。サークル運動のなかでよく語られる「ゆきづまり」という問題意識も、①そのことの原因探求と「ゆきづまり」打破の模索が新たな思想創造の道すじをどのように生んだのか、という問題として考えることもさることながら、②サークル「ゆきづまり」のなかまた別の道を選んだ（——結果的にサークルはその存在を消滅させる）人びとにとって、一時期のサークル経験とは何か、という本書とはまた異なる「サークル論」が必要になってくるのではなかろうか。

この書評を書くことはしんどかった。すでに応答してくれる著者は鬼籍に入っている。道場の社会運動についての方法論的批判はかつて行ったことがある⁽¹⁸⁾。その際、若干、彼との対話があったが、そのまま（おそらく）「別の道」を歩んでいた。2017年10月12日から国立歴史民俗博物館企画展『「1968年」——無数の問の生まれた時代』の準備に関する共同研究で改めて「再会」した。「別れて歩まん 共に歩まん」との感慨を強くしたが、もう対話は叶わなくなってしまう。とすれば、より広く問題を——それこそ「批判的公共性」の空間に向けて提示することが求められる。この書評がそれに成功したかどうか、自信がない。

（道場親信著『下丸子文化集団とその時代——一九五〇年代サークル文化運動の光芒』みすず書房、2016年、411頁、定価3,800円＋税）

（おおぐし・じゅんじ 信州大学人文学部准教授）

(13) 小関智弘『大森界限職人往来』朝日新聞社、1981年。同『羽田裏地図』文藝春秋社、1982年。

(14) 安田常雄「〈占領〉の精神史——「親米」と「反米」のあいだ」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座10 戦後日本論』東京大学出版会、2005年。

(15) 前掲、道場『抵抗の同時代史』。

(16) 鶴見俊輔『高野長英』朝日新聞出版、1985年など。

(17) 『近代日本社会運動史人物大事典』日外アソシエーツ、1997年。

(18) 拙稿「書評：道場親信『占領と平和——（戦後）という経験』」『社会思想史研究』第30号、社会思想史学会、2006年。